

論文の内容の要旨

論文題目 当事者研究に関する理論構築と自閉症スペクトラム障害研究への適用

氏 名 熊谷晋一郎

本論文は二つの目的を持っている。一つ目は当事者研究という実践について、その歴史、理論および方法についての考察を行うことである。そして二つ目は、自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorders: 以下 ASD とする)の先行研究を概観した上で、課題を抽出し、当事者研究の方法を適用することでそれら課題の一部に応えることである。

第一章では、ASD についての先行研究を概観し、そこから課題を抽出した。歴史社会学的研究、生物医学的研究、人類学的研究によれば、ASD は個体特性に多様性があり、社会性に障害があるというよりも社会性のレパートリーが多数派と異なっている可能性が示唆される。障害者の個体特性とみなされる「インペアメント」と、インペアメントと環境要因との齟齬である「ディスアビリティ」という障害学の区分を用いるなら、ASD 概念はディスアビリティの次元で検討されるべきものをインペアメントとして扱ってしまう可能性があり、多様な特性に配慮した支援や研究だけでなく、自然科学的な研究の進歩をも阻害しうる可能性がある。以上の検討から導かれる課題は、① ASD カテゴリー内部の多様性だけでなく、コミュニケーションや社会性の様式にも多様性があることを前提にした研究 ② ASD 者の認識、判断、行動における個人の内部のメカニズムにおけるインペアメントを、社会との相互作用を主な場とするディスアビリティと区別しつつ詳細に記述していく研究 ③ 支援を考える上で重要なアウトカム変数である主観的変数を考慮に入れた理論や経験的研究 の 3 つである。トマセロの言語発達モデルを踏まえると、対人関係以前の特性の同定には「連続的な知覚運動経験に本人がどのような離散的パターンを発見しているか」という主観的経験を探究する必要があるが、先行研究では、ASD 者は具体的な経験記述をするのが苦手であると報告されている。本論文では、こうした限界は ASD 内在的な特徴ではなく、類似した経験を分かち合う場の欠如による二次的なものであるという作業仮説を置き、当事者研究を ASD 研究に取り入れることが課題に応えるうえで重要であると提案する。

第二章では、当事者研究の歴史、理論、方法について考察し、第四章以降の当事者研究の準備として記述系の構築を行った。21世紀になってから我が国の当事者研究が活性化した背景には、「自立生活運動」、「認知行動療法と社会生活技能訓練」、「ピアサポート実践」、「べてるまつり」などの先行する取り組みがあった。当事者研究は、研究という営為と回復という現象の内在的な関係について洞察を与える特徴がある。研究とは真なる知識を得ようとする共同的な実践ともいえるが、知識に真理性が与えられる条件に関する真理論の議論を踏まえると、1. 知識が現実と対応している (本論文では *correspondence* 条件と呼ぶ)、2. 知識体系が内的な整合性を持っている (CKB 条件)、3. 知識が目的論的な枠組みに寄与する有用なものである (CKG 条件)、4. 知識が他者と合意されている (*consensus* 条件)、そして 5. 知識の獲得・維持・検索がコスト

制約下で最大の効率性を発揮するものである (cost-efficacy 条件) という 5 つの条件が導かれる。

フリストンの自由エネルギー原理は、生物が病 (disorders) に抗して秩序の回復へと向かう傾向性を自由エネルギーの最小化として説明しており、この原理から、現在提唱されている脳の統一理論のほとんどすべてが数理的に導かれるという点で注目されている。同原理から 5 条件のうち consensus 条件以外の四つが導かれ、研究と回復の二つが自由エネルギーの最小化という生物一般の傾向性によって架橋される可能性が示唆される。

これら 5 つの条件を維持する制御系の神経基盤についても様々な議論がなされている。生物の長期的な目的 (生得的な目的:HCS、学習された目的:ACS、想像された目的:ICS) を表象しつつ CKG 条件を維持していると同時に内臓感覚の correspondence 条件を維持している「帯状弁蓋ネットワーク (Cingulo-Opercular Network: CON)」と、短期的な目的を表象しつつ CKB 条件を維持していると同時に外受容感覚の correspondence 条件を維持している「前頭頭頂ネットワーク (Fronto-Parietal Control Network: FPCN)」の二つが重要である。目的と現実のずれを埋める予測符号化の結果、Anoetic レベル (非明示的でカテゴリーカル)、Noetic レベル (明示的でカテゴリーカル)、Autonoetic レベル (明示的で一回性) の知識と意識が構築される。他方、consensus 条件についての先行研究では、知識や意識の correspondence 条件は一人きりの内省だけでは十分に与えられないが、特性の近い者同士の非明示的な共同行動や明示的なコミュニケーションを媒介にして高められると報告されつつある。このことは、類似した当事者同士の共同行動とコミュニケーションによって、5C 条件を満たした知識と意識を作り共有しようという当事者研究の枠組みに支持を与えるものであるといえる。

第三章では、本論文で参照する筆者がこれまで展開してきた ASD の当事者研究における対象者についての記述を行い、対象者が自閉症スペクトラム障害の診断を満たしていることや、不安傾向、抑うつ傾向、反芻傾向、聴覚過敏、構音障害、PTSD の兆候を有していることが確認された。また自己記述からは、1. 幼少期から他者や集団との間につながれなさや読めなさを感じてきたこと、2. 声を使って話すことが困難で手話を自己表現の手段として活用してきたこと、3. アルファベットの読みにくさを感じてきたこと、4. 普通のふりをして過剰適応してきたが 10 代の頃に破たんを経験したこと、5. 診断を得ることで楽になった反面、ASD 概念には公正さの面で問題を感じていることなどが確認された。

第四章では、対象者と筆者とが日常生活において生じるいくつかの逸脱事象を起点にして当事者研究を行い、「まとめあげ困難仮説」というモデルによって対象者の対人関係以前の特徴を明らかにすることを試みた。まとめあげ困難仮説は、第 2 章で紹介した Anoetic レベル、Noetic レベル、Autonoetic レベルの 3 階層のすべてにわたって情報の統合不全が生じているという仮説である。

この特徴を第 2 章の記述系に当てはめ、さらに先行研究も参照すると、対象者の制御系の特徴について、A. 予測誤差精度が高い。B. CON 下部構造と FPCN との機能的結合が弱い。C. CON 上部構造と CON 下部構造との機能的結合が弱い。D. CON 上部構造と FPCN との機能的分化が不十分である。という 4 つの特徴が推測された。

第五章では、当事者研究を行うことで生じた対象者の経験構造の変化に注目し、対象者の特徴の変わらない部分と変わる部分の境界線について考察した。当事者研究の中で対象者は、自分の体にとって自動化しやすい話し方や生活パターンを、他者から探索的に取り込んだり、自分自身の経験構造のパターンを、当事者研究を通じて積極的に言語化し、他者と部分的に共有していたり、一回性の自分史を当事者研究の場で分かち合い自らも振り返ることで、人生の長期的な目的論的構造（ICS や ACS）を、身体が生理的に欲求する HCS と coherent なものへ、ゆっくりと組み替えていきつつあると考えられる。こうした Anoetic レベル、Notic レベル、Autonoetic レベルの再まとめあげとメンタライジングは、経験を表現するための新しい語彙と論理、行動パターン、目的論的な価値観をうみおとし、慢性的な疲労、他者の侵入、フラッシュバック、反芻、不安・抑うつなどが著明に減少し、メンタライジングがなされた他者との共感・共同注意・共同行動や、展望記憶などが増進した。ただし、当事者研究を通じてうみおとされた新しい語彙や論理に注目すると、対象者の変わりにくい特徴としてカテゴリー化の稠密度の細かさが存続していることが示唆されている。上記のような変化を踏まえて、対象者の変化しにくい特徴を再記述するとすれば、上記の A~D の制御系の特異性のうち A のみが変わりにくい特徴であり、C~D については対象者の予測誤差精度に合わせた Anoetic、Noetic、Autonoetic な再まとめあげとメンタライジングによって改善しうるものである可能性がある。

第六章では、第四章で提案したまとめあげ困難仮説を、ASD に関する三つの認知科学的な先行研究（心の理論障害仮説、実行機能障害仮説、弱い中枢性統合仮説）と比較した。

心の理論障害仮説は、他者との明示的、非明示的なメンタライジングの障害が根本的なインペアメントであると主張しているが、定型発達者中心の社会を可変的な人為的環境とみなすならば、メンタライジングの障害という記述は、インペアメントよりはディスアビリティの次元により関係の深いものになる。弱い中枢性統合仮説は、まとめあげ困難仮説のうち外受容感覚の予測符号化に関する部分と整合的であるが、内臓感覚の予測符号化や内臓運動の制御、目的指向的運動の問題についてはうまく説明できているとは言い難い。加えて、中枢性統合の各要素（時空間的な注意の広がりの問題と、階層的カテゴリー化）とを別々のものとしてとらえており、相互の関係に関して整理されていないため、経験的なデータの解釈に齟齬が生じている。まとめあげ困難仮説ともっとも親和性が高いのは、三つのうち実行機能障害仮説であるが、「計画」「柔軟性」「抑制」「生成」「自己モニタリング」といった実行機能の各構成要素に特異的な評価を行う課題が開発されていない。

本論文では、対象者との当事者研究を、制御系に関する知見とすり合わせることで、一人の ASD 者の経験と行動について包括的な記述とモデル化を試みた。その結果、社会性やコミュニケーションの問題、こだわり行動といった表現型の原因の少なくとも一部として、予測誤差精度の高さというインペアメントが存在する可能性が示唆されるとともに、当事者研究を通じて本人の予測誤差精度に合った知覚・行動パターンや知識を生成し共有することによって本人の苦悩の一部と他者とのメンタライジングが改善しうる可能性が示された。

今後は本論文の内容を、実証的な研究で検証していく必要がある。